



お兄ちゃんの本に興味津々のあちゃん

**受け継がれる本の思い出**  
 沙織さんが子どもたちに絵本を読んでもうけたという思い出。それは絵本と家族の思い出だと言います。「私が幼いとき、お母さんがよく絵本を読んできていました。でも、私の妹と弟が生まれてからはなかなか『お母さんも忙しかったんだらうな』って、私も母になつた今なら分かります」と沙織さん。

**私にとって人生の支え**  
 「小学生のとき、先生が『自分の好きな本を読めばいい。年齢にあった本を読む必要はないんだよ』と声をかけてくれました。その言葉があったから本を好きでいられたのかもしれない」  
 分厚くて長い話の本や外国が原作の本が苦手だった沙織さん。「逆に、短い話の本や話の展開が早い本は好きでした。それに料理の本とか詩集とか。詩集が好きすぎて、好きな作家さんの出版社の試験を受けに行ったこともありましたね。私の人生を振り返ると、そこには必ず本がありました。生きていたら、悲しくなるときも



次々に絵本をもってくるあちゃん

どうして怖い話が多いんでしょうね。おじいちゃんが話すのはいつも怖い話ばかり。あときは怖かったけど、今ではいい思い出です。  
 足の調子が悪かったおばあちゃんは遠くに絵本を買いに行けなかったから、近くの郵便局で絵本を買ってくれた記憶があります。絵本は、面白い話もあれば、寂しい話もありました。その絵本は、今でも大切にっていて、私の子どもたちにも読んであげています」



家には子どもたちと読んだ絵本がたくさん

必ずあって。ちょっと気持ちが悪く向きのなつたとき、詩集を読むと前向きになれる。それと、子育てが大変で子どもたちにあたってしまったとき。そんなときに、私のお母さんとおばあちゃん、おじいちゃんの記憶がよみがえって、『ちょっと頑張ろう』って思えるんです。私にとって本は、心の支えです」

## たすけて！司書さん

沙織さんは今でも本が大好きです。昔読んだ本をもう一度読みたくなったり、テレビで紹介された本を読みたくなくなったりもします。話の内容はかすかに覚えているけど、本の名前をどうしても思い出せないこともしばしば。そんなときは、図書館の司書さんに話の内容を話して、本の名前を覚えてもらうそうです。「本の名前にたどり着いたときに『あ、それだ』って。その本が図書館に置いてなくても、県内の公立図書館から取り寄せてもらえるので助かっています」。

来島に新しく図書館ができるので楽しみにしています。頼原の図書館司書の成田さんともよくお話するので、これから『ここに通います』と、沙織さんは子どもたちに絵本を読みながら笑顔で答えてくれました。



お母さんが買ってきて、おばあちゃんが読んでくれた絵本



## 第1章 心の支え

ここは頼原にある図書館（飯南町立頼原図書館）。6人で1冊の本を囲むのは山下さん（上島）親子です。幼い頃から本に触れてきた子どもたち。それはお母さんの沙織さんも同じです。

### 本とお母さんの膝の上

「本読んで」とお母さんの膝の上に座るのは、のあちゃんとおんちゃんです。その周りにお姉ちゃんとお兄ちゃんが腰かけて本を囲むのが、山下さん親子の読み聞かせスタイル。

沙織さんは子どもたちの表情を見ながら、少しずつ声のトーンを変えて本を読みます。「膝に座らせて読むと顔は見えないけど、『大きくなったなあ』って。上の子3人は一人で本を読めるようになったから、こんな風に本を囲むのは少なくなりました。少し寂しいけど、これもまた成長ですよ」と話します。5人の子どもの場合は、幼いときからお母さんの膝の上で本に触れてきました。

### 何度だって読んであげたい

毎週木曜日は保育所の「絵本借りの日」。あんちゃんとのあちゃんは絵本を借りてきて、

寝る前にお母さんに読んでもらいます。「本当は毎日寝る前に読んであげたいけど、平日はなかなか読んであげられなくて。寝るタイミングとか、一人一人ペースが違うから難しいんです」と沙織さん。

絵本は買って読みたいという沙織さんは「何回も読んでもいいし、読みたいときにすぐに読んであげられるから。最近は保育所や図書館で借りることが多いです。本当は買いたけれど、意外とお金がかかったらうんですよ」と。

何回も買っているお気に入り絵本が破れて、どうしても読めなくなったときは、もう一度買うそうです。

「みんなに読んであげたいんだし、みんな読んできた本だから。読めなくなるまでは、破れてもテープで貼って。そういう思い出がその本には詰まっています」